
『約200文字小説から始まるもの』

イナリズーシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『約200文字小説から始まるもの』

【Nコード】

N2245M

【作者名】

イナリズーシ

【あらすじ】

あるいは何時か、それらしらしく書くかもしれないもの。あるいは何かの何か・・・何気に殆ど話は繋がってます。上から順を推奨。

5 行小説（実話）

「農民は何を食べるのじゃ？」
將軍は無邪気に聞いた。

「は！ 農民は稲のそばに生えている稗や沫を食して御座います。」
「ほう、ならば米は必要無いという事だな。年貢米をもっと増やせ！」

こうして、ある時を境に年貢のノルマが急激に増えた。

くあとがきく

これは前世の記憶の一部です。

女の人の記憶なのですが將軍家に嫁いだ際に、將軍と部下のやりとりを耳にしました。

民の境遇を一切知ろうとしない立場の者達の考え方は常軌を逸しているものでした。

まさか、民の苦しみを見ている部下が將軍の言いなりになってしまふ。

女は凄く驚きました。というか私が驚きました。

將軍に対して少しでも意見すれば、保身に關わるのでしようが、その後には農民達がどうなったのか、とても心配です。

時代は何時ごろかは覚えていないけれど、江戸時代のいつかで、記憶はあいまいです。

女にとっては人生で最もカルチャーショックで記憶に深く刻まれていたのかもしれない。

スモモから生まれたスモ次郎

スモ次郎は悩んだ。自分の股間が酸っぱい事に悩んでいたのだ。スモ次郎はスモモから生まれたので別に股間に限らず酸っぱいのが本人は股間を気にしている。酸を抑えるためにスモモは色んな努力をした。例えば牛乳振りかけてみたりして中和したり……でも無駄だった。そんなスモ次郎に転機が訪れた。

「酢飯の酢にならんか？」

そう寿司屋の親方はスモ次郎に言い放ったのだ。ついにスモ次郎の居場所ができた。

誰もが「それでいい」「そこがいい」「そこじゃなきや駄目なんだ」と言っただけで必要としてくれる居場所だ。

もう酸っぱい匂いに周囲の目を気にする必要は無いのだ。

スモ次郎は今日も元気に炊飯器の中に入る。寿司を食べるお客さん
為に……

変ホテル

手術室。手術台。ベット。

ホテルのエレベータで地下一階へと向かった少年は目撃した。

怖くなり部屋に戻り両親に報告するも信じてもらえない。

父を連れて地下へ向かうも、手術室は初めから無かった様に存在しない。

ホテルでの滞在は、あと2日

当日の夜は少年は怖くて眠れない。

深夜3時、父と少年は一階のアイス自販機に行き、アイスを食べる。

その帰り、エレベータが地下1階へと行くのを目撃

父は肝試しの様なノリで少年を連れて行こうとするが、少年はエレベータを降りずに拒否する。

父が地下一階のエレベータ外で少年を誘うも扉は閉まる。

ので2人は帰る。

その頃、地下一階奥では、手術室、手術台、ベット、があつて黒い衣を纏う者がメスを握っていた

変ホテル2

「この肉うまいな〜！」

男はホテルのバイキングレストランで朝食している。

直ぐ隣にて

「この肉なんか臭いな・・・」

女の人が肉に違和感を感じている様子でシェフを呼びつけている。

その隣にて

少年と、その父母が朝食している。

その更に隣の隣の隣の隣の隣の20mくらい先、ホテルのロビーにて
車椅子に乗った少女と黒スーツの男6人が少女の付き添いでいて内
男5人が、エレベータへと乗り込み扉が閉まる。下へ向かう。

5

少年と家族の明るいムードで食事してる。

少女は暗いムードでロビーにてテレビを見てる。

「ちよつと遊んでくる」

少年は飯食うの早すぎて親を待つ羽目になった。

たったかたーと、テレビの前に近寄り、チャンネルを変える。

少女は少年につっかかる。

少年は無視する。

「テレビつまんねー！」

少年はテレビに飽きる。

とともにテレビの脇に置いてある、スーパーファミコンを見つける。
ソフトはマリオカーのみ

古すぎじゃん!!

「なにこれ!! マリオカートじゃん!!」

少年は、じゃんじゃんテンションで、配線くっつけ即プレイ。
クッパ場がクリアできない。

「貸してみる」と、少女は、無言でコントローラ奪い天才的ドリフトかます。

少年「すげ〜!」

な感じで少女に敬意を示す。

そこへ、少年のパパ、ママ登場。

少年を連れて行く。

「後で対戦しよう」的な約束を交わす。

旅先、秋芳洞についてパパは語りながら歩く。

明るいムード漂う。

一方、その光景を寂しそうに見つめる少女に暗いムードが漂う。

少年の家族らは旅先で遊ぶ。

ホテルに帰ってきて少女とゲーム。

その夜、少年は目を覚ます。

手術台の上で、ねかされている。

注射が打たれる。

眠りにつく。

メスやらドリルで、からだ中をいじられる。

数時間後

「この肉うまいな〜！」

女はホテルのバイキングレストランで朝食している。

直ぐ隣にて

「この肉なんか臭いな・・・」

男の人が肉に違和感を感じている様子でシェフを呼びつけている。

その隣にて家族3人が座る筈だったテーブルの席が空いている。

ホテルのロビーは静まりかえり、カウンターに担当者が一人居る。
他誰も居ない。

死痛苦

イメージしてください。以下の文字列は紙に書かれた手書きの文章であり画像としてアップロードされると仮定して見て下さい。

┌画像始まり┐

死死死死死死死死死死死死死死

苦痛死死死死死死死死絶死死無死死

亡死死死死悲シシ夜死死死血死死刺死

燃死死死死シシシッ死死死死シ死死死

血が流れてめぐる。

クルクル回る。

心臓がなる。

のどの音。

脳が溶けて。

呼吸の音がリズムを崩す。

目が動く。

足が動く。

手が走る。

リズムが終わる。

消えていく。

柔らかなメロディーは音を変え、激しく燃えて

静かに終えた。

4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4

1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3

1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3

彼岸花に口づけを。
黒赤のバラに思いを乗せる。
く画像終わりく

この上記の画像を見てしまった人間は当日中に死にます。
死因は呼吸困難の一種であり苦痛の中で死んでいきます。
ですが助かる方法が一つだけあります。
方法は、この画像を沢山の人間に見せる事です。

この死のルールは一日に死ぬ人間は一人までであり、見た人間の中からランダムに選ばれます。
沢山の人に見せるほど、今日、自分が死ぬ確率が小さくなります。
100人が、これを見れば、最大で100日は生きられるでしょう。
う。

運が良ければですが……

この文字が書かれた紙を知ったのは友人からです。
友人は 学校へ行く途中で 紙を道端で拾いました。
そしてクラスメイトに見せました。
その内の一人が私なのですが クラスメイトたちは3日の間に約2
4時間ごとに1人のペースで死にました。
信じたく無かったのですが 余りの非現実ぶりに呪いの文章だと思
ってしまいました。
怖くなった私はデジカメでこの写真を撮って仲のよいメルトモに相
談しました。
ですが返事が返りません。
何時も24時間以内に返してくれる彼がメールを返してくれないの
です。
彼は呪いで死んだかもしれませぬ。

もし モニター越しでも死んでしまうルールなのだとしたら あり
えます。

ならば私の命は助かるかもしれません。

4人目が死んだ段階で見る順番と死ぬ順番は関係なさそうな事が判
つています。。

よって沢山の人に この紙をモニター越しに見せれば 私が生き残
る確率が上昇するかもしれないのです。

ですので 皆 じゃんじゃん見て私の代わりに死んでください。
生きなければ沢山の人に見せてください。

つづき

人が死ぬ文章を投稿する事によって起きる死の罪は誰にあるのだろうか？

死ぬと判っていて人に、それを見せるのだから殺意があるのと同じ意味では無かるうか。
仮に罪を肯定しても裁判になりえるのか？

法律では神、霊的現象の事件は責任の所在は何処にも無いとはつきりと明記されているし・・・
仮に法律がそうであっても、死んだ人の遺族は裁判を起こすのだろうか。

駄目と判っていてもやる事なんて、他にないだろうし・・・

私は、そんな事を考えながらモニターを凝視していた。

無意味な文字の羅列。一応、ネット調べてみたが、何か判った訳ではない。

唯一検索キーワードに引っかかるそれらしいのが『苦痛死』という単語である以外には・・・

『苦痛死』で、まず目に飛び込んで来たのが二酸化炭素による苦痛死だった。

保健所に送られる野良猫や野良犬は最終的に引き取り手が無い場合、炭酸ガスによって窒息死させられる。

安楽死が愛護団体から求められるが、処分施設の従業員の命の安全を考慮して、その他のガスは使えないらしい。

また、個別に安楽させる場合、注射、薬剤が必要になり、コストが掛かる様だ。

子猫一匹約35円、大人の猫で500円というレベルらしい。

これ以外に苦痛死のキーワードでは、特に目に留まるものはなかった。

私は、この字の羅列をしばらく凝視していたら、『亡死』に注意が向いた。

逆から読めば死亡であるのだが、この文字配列は中央にシを起点にして、左へも右へも読める様になっている。

試しに苦痛死を右から左へと読んで『死痛苦』というキーワードで検索をした。

調べると中国園でのヒット率がやけに多く、読解が難しい。

ネット辞書の中国語翻訳で、『死んでも苦痛』という意味だったが、特に、意味があるとは思えない。

それから私は何気なく中国語サイトをブラウングしていた。

と、その時、私の興奮は頂点に達した。

見つけてしまった。

全くこれと同じ画像が其処にあった。

私は重点的にその画像の周辺の翻訳に勤めていたら、投稿者と連絡を取れる可能性があるのに気づいた。

素人レベルの勉強をして、つたないカタコトの翻訳でコンタクト

を取った。

相手からの返信を読解して判ったのが、中国では半年以上前から、これと同じ画像が広まっっていて、『死痛苦』という呼び名がついているらしい。

そしてその『死痛苦』に関わり、死んでいった人が沢山居るらしく、私の仮説通りの話だった。

私は、そのとき恐怖した。心のどこかで単なる偶然だと思いたかったのだ。

そう思えばメル友が死んだのは自分の責任では無くなるからね。だが、まだ大丈夫だと思う。一時、冷静さを失った私だが、まだ偶然の一致という可能性も残されていると思った。

中国で『死痛苦』を投稿している彼は狂言者かもしれないし、私の語力では真実まではやはり判らない。

私はとにかく事が起きるか時間を待つことにした。というより、それしか出来なかった。

約1カ月後

全ては真実だと判った。

事件と噂は日本中に飛び交っていた。

マスコミやメディアでも『死痛苦』は報道され、もはや日本人で知る者は居ないというレベルまで広まった。

しかし、そこで疑問が一つ残った。

中国側においては、日本で事が起きる以前にマスコミを通す程の広まりは無かった。

中国で死者が出ているという情報は一切聞かない。

日本国内においてのみ死者が現れている。

私は、この瞬間物語の真実が判った。

この事を知らせる為、警察へと掛けもつとして玄関口の扉を開けた
その時

私は死んだ

怪文書57人死亡事件特別捜査本部警視庁特別会議室設立

この事件は略して「57事件」とも呼ばれている。

57人目の死者が出てようやく事件として形を成したという訳で57事件と呼ばれた。

なぜ、57人目になるまで遅れたのかというと、本部は、自然死として扱うべき意見と、統計的不自然さを扱うべき意見と、議論している間に漠然と時間が過ぎていったのだ。それはいわば、事件が起きてから57日目でもあるけど・・・

各方面研究機関に要請し、各機関の書類上の手続きをし、それらのペースで事なかれの様に他人事のようにした結果としての57日である。

しかし、この57日目に会議が設立された時点において、全ての事件の真相は明らかだった。

そして、手遅れだった。

この情報はトップシークレットでありながらも、その重要生に要人たちは口を紡ぐ事が不可能で、すでに世界中へと拡散していた。

小説

救急車が患者の下へと駆けつける。

隊員が降りて救命措置をしているその時、隊員の一人が突然自分の首を絞め始めた。

「うつつがあっ！」

息が出来ずにもがいている。目はしる目、唾液が口からたれる。体を前後左右に揺らし痙攣している。

同僚に助けを求めるその苦しむ姿は死痛苦の症状だった。

隊員は直ぐさま救命措置をされ生き残った。

人口呼吸器が早期に取り付けられた事が幸いしたのだ。

ベットの上で彼は確かに死んでは居なくて生きている。

死痛苦の症状を併発して生きていた事例は彼のみであった。

彼はすぐさま検査にかけられて死痛苦の原因究明に使われた。

一方、その頃、私は

は死んだ。

と

思ったけど過労死で倒れただけだった。

マンションの玄関から出て倒れた為に住人に発見され救急車で運ばれて私は病院で目覚めたのだ。

最近、色々と妄想して疲れていたのだろう。

だが、そんなことより、とにかく警察に行かなければ・・・

私が知っている事を伝えなければ・・・

私はベットから降りて小走りに警察へと駆け込み事情を話した。

しかし、半信半疑のリアクションで信じて貰えない。

全ての事態の可能性を想定し消去法で消して行って導き出した答えだから、説明に10時間掛かるのは仕方が無い。

資料を用意して読んで貰っても10%も理解されている様な気がしない。

このままでは不味い。

私は、とにかく皆を避難させるべく行動を起した。

地震がこれから起きて大津波が来ると嘘をついて山の上に避難さようとするが無理だった。

そうして入る内に事は起こった。

上空からヘリコプターが一基。何かを落とした。

落としたのものは音もなく、

何も起こらず静まり返る。

そしてへりは爆発した。

へりの爆発を見る住人たち。

しばらくして、街の住民は苦しみ始め悶え始めた。

死痛苦の宴が聞こえる。

私を含め、周りの人間が全て死んでいく。

お願いだ。夢なら覚めてくれ……

「私が死ぬ少し前 警察幹部達の会議にて」

A「中国側に怪文章があるのに中国では事件が起こらずに日本のみで起きるといふ事は……」

B「中国と日本の発展を邪魔するテロか、あるいは、中国そのものに原因があると想定されます」

A「中国は日本より半年前程から、噂は広まり始めるもその規模は、とても小さく、死人が出ているという報告は無いでしたね。ですが、怪文書の発端がそこにある以上、中国側に協力を要請して貰わない

といけません。」

B「テロの可能性として専門家たちの間では、新型ガス兵器という説があります。」

たとえば、ガスが遠距離からピストルの弾丸の様に対象物めがけて飛び対象物の前で拡散し脳神経の呼吸器に関わる部位を麻痺させる。体内に残存しても、血流が止まった瞬間から体外へと放出される。始め、心停止1分もあれば痕跡が残らない。だから心臓が止まってから心肺蘇生をしても、助からないのだそうです。しかし、あくまで仮説の一つであり存在していればの話で、実際はこの様な関連技術のさえも技術レベルで発見されていないそうです。しかし、もし、あるとすれば大変危険で、今後、大規模なガステロの可能性があります。これまでの事件は犯人にとっては、あくまで練習やゲームでテロの為の演習かもしれませぬ。」

A「両視点から捜査を続行を続けるが、中国側が協力しないとなると、事件の解決はまだ、長くなりそうだ。そしてこの情報は公にはできない。報道規制も入れる。既にネット上では議論等で仮説が流れているが、いずれにせよトップシークレットだ。これを公にしてしまえば、経済システムもストップしてしまうし、仮に公にしても敵に情報は筒抜けになる。その瞬間からテロ攻撃を受けかねない。そうなれば逃げ場所そのものが攻撃対象にもなりえる。」

重い足取りで腰を上げるC

「・・・だが、我々の安全だけは保障されている・・・、

中略

物語の真相は中国人がフザケテ書いた死痛苦を利用したものだ。た。

死痛苦にあつた噂話を利用して殺人の実験をしていた犯人の正体は作者でした。

〜完〜

「なんだよ！ この小説は！！」

彼は怒っていた。死痛苦の現象が世間を賑わしているさなかに発表されたこの『死痛苦の真相』というタイトルの小説にカモられたのだ。

この小説を読みながら激怒する彼は、愚痴を吐きながらもそのとき死んでしまった。勿論、死痛苦で・・・

死痛苦再開

救急車が患者のもとへと駆けつける。

隊員が降りて救命措置をしているその時、隊員の一人が突然自分の首を絞め始めた。

「うっがあっ！」

息が出来ずにもがいているのが、目はしろ目、唾液が口からたれる。体を前後左右に揺らし痙攣している。

同僚に助けを求めるその苦しむ姿は死痛苦の症状だった。

隊員は直ぐさま救命措置をされ生き残った。

人口呼吸器が早期に取り付けられた事が幸いしたのだ。

ベットの上で彼は確かに死んでは居なくて生きている。

死痛苦の症状を併発して生きていた事例は彼のみであった。

彼はすぐさま検査にかけられて死痛苦の原因究明に使われた。

だが何も判らなかつた。

彼の体内に確かに未知の物体があるのだが、それが何なのか判らない。

その後、彼の事例を想定して人工呼吸を死痛苦の発生直後にしたものの誰一人助からない。

彼だけが特別体質としか言えない。

よって、彼はこれから人体実験される事になる。

彼は研究施設に半ば強制連行され不安そうな表情をしている。国に協力するのは国民の義務であるし給料も貰えるが、やっぱり不安そうだ。

患者服の様なものに着替える為に個室が与えられ、着替えていた。

その時、彼は背後から何者かに口を塞がれ拉致された。

行方居不明なつた彼は、数日後、街中をフラフラと歩いている所を救助される。

彼の記憶からは失踪前後の記憶は一切無く、また、体内にあった特別物質も消え去っていた。

実験は終了し現実の生活に戻る彼は、空を見上げて祈るのが趣味となっていた。

「へおいいえん v p を え m ふ お w @ b r」

と意味不明な事を口走り、空に祈るのが日課となった。

僕が子供の頃、当時、4歳くらいだろうか。

窓の外で大きな気配を感じて窓辺に歩み寄り2階から転落した。

頭に大きな損傷を受ける意識不明となるも助かった。

奇跡だと周囲は言っていたらしい。

この時の唯一残っている記憶が、窓へと駆け寄る自分の後ろ姿だ。

不自然な記憶にオカルト的なものを感じるも、現在の僕は、この現象を理解している。

幽体離脱でもデジャブでも脳の誤作動でもない。

窓の外に居た存在は僕を監視する者である。

必要事項に応じて必要となるデータを採取すべく僕の脳をダウンロードする役目だ。

その存在は、全人類に割り当てられていて皆監視されている状態にある。

全ては、ある一人の人間の記憶データを回復する為であるが、この計画は1万年以上前から始まっていた。

彼は宇宙を旅している間に事故に合い、地球に不時着した。

宇宙船は運悪く壊れていて仲間との連絡もとれなかった。

そこで彼は自分が死んだ後に仲間に蘇えらせてもらう為に脳内の情報をアダムとイブにインプットした。

彼らから始まる子孫たちはインプットされたデータがその都度、分裂を繰り返し、未来へと情報の断片として繋げて行く。

その情報の断片を採取しているのがその存在で、彼の生前の記憶のバックアップと宇宙航行の後の予測される記憶との整合性を高め彼を再度蘇らせようとしている。

この行為は西暦0年頃から行われ、ちょうどエジプト文明の終わり辺りから始まるのだが、現在2000年で、あと少しで、この計画が終わる様である。

この計画が終われば、彼らにとって地球は用済みとなるだろう。だが

――――

――――

――――

――

――

しみつたれたアパートにて玄関の扉が開いている。

その奥ではテレビがあり上記の番組が放送しているが誰も見えない。キッチンも部屋にも誰も居ない。住人は居ないようで、その番組音だけが寂しく鳴り響いている。そして、なぜか男が玄関口で息絶えていた

つづきの つづき

今、私は死んだのだ。

と

思ったけど過労で倒れただけだった。

。 気を取り直して起き上がり玄関を閉めず警察へ駆ける

しかし、半信半疑のリアクションで信じて貰えない。

全ての事態の可能性を想定し消去法で消していつて導き出した答えだから、説明に10時間掛かるのは仕方が無い。
資料を用意して読んで貰っても10%も理解されている様な気がしない。

このままでは不味い。

私は、とにかく皆を避難させるべく行動を起した。

地震がこれから起きて大津波が来ると嘘をついて山の上に避難さよ
うとするが無理だった。

と、その時、見えた。

大きなトラックが沢山いるのだが、明らかおかしい。

荷台のコンテナが開いていて白装束の怪しいやつ等が、何かをして
いる。

白い煙みたいなのが黙々と見える。

ガスマスクを着用したやつ等は明らかにテロリストそのものだ。
もう駄目だと思った。

私はとにかく逃げた。
遠くに逃げた。

山の上なら気圧のせいで、ガスはやってこれないだろうから、とにかく逃げた。

途中、橋の下でダンボールに入った捨て子猫を見つけたので拾いました。

私は一人と一匹で逃げきった。

この街の住人はどうなるのだろうか？

あのガスが本物ならきつと大変な事になるだろう。

く山の上にてく

思いのほか他にも逃げてきた者達が沢山居た。

私と同じ考えを持つ者は私以外にも居たという事だろう。

33人の避難が居るなかで、ひととき目立つグループが居た。

黒スーツの集団の男が8人、明らかにヤクザと思われる。

それが杖のついた老人と車椅子乗った少女を護衛する様に周囲を囲んでいる。

明らかに不自然な不陰気に誰一人、そこへは近付かない。

私も目を合わさない様にしていたのだが、なんとそいつらは近付いてきた。

偶然行きたい所、歩きたい場所が同じとかじゃなくて、真っ直ぐ自分に向かってくる。

そうして護衛が自動ドアの様に開き、

「その猫を触らせろ！」

少女がドスの効いた声で物申した。

私がビビッて硬直していると、少女は近付き猫奪い取りなでなでする。。

「お前の猫か？」

「い、いえ、違います。さっき拾いました。

「そうか・・・」

と、そこへヤクザな老人歩み寄り。

「ウチのがいきなり申し訳ない。」

「いえ・・・」

「こういう事態だからこそ、 したいですな」

「え？

「いえいえ、こちらの事です。

「あの・・・」

「はい？

「これから、どうなってしまうのでしょうか？

「それは、私にも判りませんが、とにかく下で、もしガステロが起きたのだとしたら、しばらくココを動けないでしょうな。」

「やはり、貴方たちも避難をしてきたのですか？」

「ええ、まあ・・・」

「この猫くれんか？」

少女が割って入ってきた。

老人と目がう

私

「いいですよ。飼うのは大変だろうし、引き取り手をいずれ捜そう
と思っただけだから・・・」

と、その時、サイレンの音が聞こえた。
救急車の音、パトカーの音が山に響く。

「起きましたな・・・」

そう言っただけ老人は街を見下ろした。

「親方！」

と、今まで一言も口を発しなかったヤクザの一人が、

「食事が整いました」

そう言っただけ、老人に声をかけた。

老人は頷くと私に

「貴方も来てください」

と言った。

ヤクザな人がそこらじゅうの人に声でかけて連れて行くところとする。

付いていかれた先にあつたのはホテルだった。

そこで差し出されたのは弁当。

30人分程あるだろうか。

避難した人間の為に用意されているのか？

私は聞いてみた。

「今日の日の為に用意されたのですか？」

「いえいえ、唯の在庫の余りです。このままでは腐りますのでどうぞ食べてください。」避難した人たちはそれを受け取り、ホテルのロビーでテレビを見ている。

テロ事件のニュースが放送を待っている様だ。

皆弁当に手を付けずに・・・

ニュース7時

今現場では何が起きているのでしょうか。

有毒ガスが依然滞留しているという事ですが私達は取材に挑んでいます。

しかし、街全体には報道者が入れない様に規制がかけられ、ガスマスクを着用した軍人が封鎖しています。

死傷者、死者数は不明です。避難した住民によると目の前で何人も人間が苦しみ出し倒れたという

一方その頃

犯人達は高速道路をひた走る

トラックが10台分走っている。

トラックは高速降りた後、港に向かい、予め用意していた逃走用の車に乗った。

その後、車はちりじりとなった後、トラック全てが木っ端微塵に爆

発をした。

一方その頃

ニュース8時

え、夕刻5時ごろに発生した事件について警察から発表はありません。

何かのテロ事件なのか災害なのか。早くに避難したと住民にインタビューを取りたいと思います

え？ 今？ これって生なの？ 私なの？ 恥ずかしいのでやめて！

と心の中で思いつつも事件の起こる直前までの出来事を話した。その途中。

緊急速報です。ただいま、東京湾において、火災が発生中です。今回の事件と何か関連があるのか、報道陣が今、現場に向かっています。

ホテルの一室にて

ヤクザが一人扉の前で護衛をしている様に立つ

室内

浴槽

「待て！」

少女は子猫にシャワーを浴びせようとするが逃げる。

「じい！ どうしたらいい？」

振り返ると爺

「洗面器に暖かい湯を張りなさい」

言われたとおりにする少女

子猫は泡まみれ。

バスタオルを取りゴシゴシする。

ドライヤー嫌がる。どらいやー的な・・・

ベットの上でじゃれあう。

服がちょっとめくれて裸が見える。

ちよつとだけ腹を舐める猫

「いら、やめ〜」

腹に大きな手術跡がチラつと見えた。

〜同時刻ロビーにて〜

「皆さん、空いている部屋があるのでお使いください。」
ロビーにてホテルウーマン鈴木が呼びかける。
困惑する人々

「御代に関しては無理にお支払い頂かなくても構いません。何分非常時ですので・・・当方としては無料でと考えております。無料ですのでサービスは至らないとは思いますが・・・部屋を空かせるのも忍びないですし宜しければ当ホテルにお泊りください。こちららカギになっております。」
配っていく。

エレベータに乗る私。同じフロアに行く何人が一緒。
エレベータ地下一階のスイッチにガムテープが張られている。
泊まったホテルで部屋は前の話で少年が居なくなった部屋と同じ。
主人公はくつろぐ。

ソノヨル

夢を見る。地下一階に下りていき、そこで羽交い絞めにされて手術される。

自分が腸引きずり出さえている。
目を覚ますと目の前に血まみれの子供が居る。
それも夢。

でも、周囲に何かが居る気配。人影がある。
ロック式の玄関口が空いている。
部屋を出る。

影が見える。

その先はエレベータ。

エレベータは動いていて地下へと向かっているのを示す。
エレベータ乗る。画うテープを剥がすとボタンが押せる。
降りる何も無い。

壁が少し開いていて隠し扉になっている。

その先を進みんでいくと手術室を発見する。

おそろおそろ手術室を除くと

「そこで何をしているのですか？」

背後から呼び止められる。

驚いて振り向く

正体は鈴木さんホテルウーマン

「あ、あの、地下はどんな所なんかと思って・・・つい、

「・・・」

周りを見渡しながら

「ところで・・・この部屋は・・・

「驚きましたでしょう。この部屋をお客様に見られては困るので降りれないの様にしていたのですが・・・

「み、見られては困る？」

笑みを浮かべる

「だって怖いでしょう。ホテルにこんなものがあつたら・・・」

「そ、そうですね」

「実はこのホテルは昔病院でして、それをオーナーがリフォームしてホテルに改造したのです」

「昔、病院だった・・・もしかして、何人も人が死んで・・・

「ええ、病院ですから・・・手術が失敗する事あるし、見取られて死んだ方も居ます。、死体安置もあります。と、すみません。怖がらせるツモリはないのですけど、ここを見た方には説明しないと・・・

・『何か勘違い』をされては困りますので。」

「勘違い？」

「・・・とにかく他のお客さんには内緒でお願いできませんか？
バれてしまうと商売があがったりなので・・・」

頷く

「は、はあ・・・ところでこの地下で何をしていらっしやったのですか？」

キヨトンとする鈴木ホテルウーマン。

「いえ、私はお客様がエレベーターで地下に行くに気付きました。ここに来たのですが、」

〈外側の人間模様〉

ガスマスクを着用したカメラマンと記者が街の中に入ろうとしている。

軍事の目をかいくぐり入った3人は目撃する。

死体の山山におののくとともに、この有様は映像として放送できないと悟る。

と、その時、一人が悶え苦しみ始める。

どうやら、軍の監視の目を掻い潜る為に荒れた場所を進んで来た為に、マスクが敗れていたのだ。

そんなこんなで、死痛苦で苦しむ記者一人が暴れ出し、他の仲間につかりガスマスクを壊してしまった。

そうして全員が死す。

〈内側の人間模様〉

困った・・・

窓の外を見たら人が苦しんでいた。白い煙を見た俺はガスだと思いつつさにガスの入り込まない場所へと入って助かった。

でも困った・・・

いつ、ここから出たらいい？

中は酸素があるとはいえ、24時間も持たないだろう。

たまたま遊んでいた風船の中に隠れたは良いけど、どのタイミングで出れば良いのか判らない。

携帯電話はテーブルの上に置いてるから、警察や救急に助けを求められない。

何時間たつたろうか、息もしにくいしシンドイ。熱くて蒸れる。

もう駄目。限界。

俺は風船を突き破って外に出て、大きく息を吸った。

問題なし！ ラッキー

だが家から出た瞬間アンラッキー！

死体の山だ。俺は恐怖におののいた。

でもラッキー！

死体から沢山の遺品。家から沢山の遺品が腐る程調達できる様だ。

俺は、とにかく強盗を繰り返し1000万くらいを自宅に貯金した辺りで軍人に見つかった。

畜生！ 900万くらいで止めときゃ良かった！！

以上、俺の話終わり！！

くガステロを起した犯人目線く

とある森の中。

大きな白いコンクリートの建物の中に

テロリスト達が集まっている。

皆、ガス防具に身を包まっている。

コンテナにガスを出す機械を運び込んでいる。

その内の一人の目の中に移るのが回想シーン（子供の頃、人称僕）

僕の故郷はゴミだ。

僕は生まれて直ぐにゴミの山に捨てられていたのをお姉ちゃんが拾って育ててくれた。

ストリートチルドレンとして僕らは貧しい生活を送りながらも、生きる事に絶望はした事ない。

弱音だつて吐かない。

だつて、そんな素振りを見せれば大切なお姉ちゃんが心配するのは判っている。

僕は大人になつてお姉ちゃんに楽しませたい。

その為に勉強する。

僕の手元には教科書がある。

この教科書は、僕の宝物だ。

偶然ゴミ山から拾ったモノだし字が読めないけど、これが読める様になつたら沢山お金が稼げると、ある人が教えてくれた。

その人は誰か知らないけれど、教えてくれた人はとても金持ちそうだったから信じた。

周りの大人達は下らない夢を見るなと馬鹿にするけど、金持ちが言

った言葉の方が説得力があると思った。
だから頑張った。

けど、僕が金持ちになる前に、お姉ちゃんは病気に掛かって死にそうだ。

いくら物乞いしても、どうにも成らない。

そんな僕の前に、あの時金持ちが現れた。

金持ちは僕のお姉ちゃんの命を助けるのと引き換えに、殺しを依頼してきた。

ある人間を殺せば助けてくれる。

僕は、お姉ちゃんの命が助かるなら何でもするし、幸せにする為になら何でもする。

だから迷う必要なんてない。殺した。

殺した相手の事は良く判らない。

ただ、偉い感じの人だったのは覚えてる。

でも、とにかくお姉ちゃんの病気は治った。

その後、金持ちは僕に

「世の中を変えよう革命を一緒に起そう」と言ってきた。

力を貸すなら一生食べる物に困らない生活を僕らに約束してくれるらしい。

僕はそれを信じて力を貸すことにした。

〈現在〉

建物のシャッターが開いていく。その最中

（そして今僕はここにいる。全てはおねえちゃんの為だ）

少年から青年となった少年は

トラックに乗り込む

鍵刺してエンジン吹かしてアクセルして車は発進。

街中にて下りてコンテナを開き装置を外に置く。

スッチ押しして操作煙もくもく広がる。ソレを見ている住人（私）が逃げ出す。

車に乗り込みそのまま車を発進

次々と人が死ぬ。

無表情で運転している。

〜2000年夏、とある大学の研究施設にて〜

研究者は難しそうな研究をしている。

その研究中に不可抗力で有毒ガスが発生して研究者が一人、死痛苦の症状で死んだ。

その状況を目撃した別の1人の科学者は極秘に研究を行い。

その有毒ガスの生成方法を見つけてモルモットで実験。

体内から痕跡が残らないのに着目

そして人体実験をした。

教授争いの邪魔になりそうな仲間を一人殺した。

その後、彼は何者からか脅迫電話を受けた。

声の主の様子は、自分の行いを全て知っていると脅し、ガスの精製方法を教えろと言ってきた。

彼は監視されノイローゼ化する。

そして、たまりかねて電話を何処かに掛けた。

その数時間後、自宅の一室に集団の男が入ってきて、無理やり首吊をさせて殺される。

〜その人の葬式にて〜

参列者の中にヤクザとヤクザな老人が居る。

〜殺された科学者の自宅にて〜

ヤクザが何かを探している。そこで回想シーン

科学者が死ぬ直前に、このヤクザに電話を掛けて話された事を思い出す。

だが読者には、まだ何を会話したのか明かされない。

〜ホテルにて〜

ヤクザの回想がおわり、そのヤクザとヤクザの爺さんが何かを話している。

一方ロビー 一階にて テレビのニュースにて人々はテレビを見る。
内容は政府が避難者難民に対する支援物資を用意している
とのこと。

〜警察にて〜

パニック状態。でも台詞なし。

壁をドンドン叩いたり、会議が開かれる。

マスコミで記者会見して、ゴミを投げられる。

〜政治家へのインタビュー〜

無視される

つづきの つづき（後書き）

<ヤクザと科学者の関係は？>

ヤクザの親友で、「だれかに命を狙われてる」と科学者から相談を受けた。

目的は研究成果で、これがもし、悪い奴らの手に渡った場合、世の中が大変な事になるかもしれない。

直ぐにでも研究成果を破棄しなければならぬが自分の研究成果を無かった事にしたくない。

もしかしたら、いつか人類に何かの形で役に経つかもしらない。だから新型ガス物質の生成研究資料のROMを部屋に隠した告げられる。

けれど、ヤクザさんは科学者さんの死後、部屋を探したが何も見つからなかった。

何者かに研究データを奪われたとすると、世の中に危険が及ぶかもしれない。

その事をヤクザの長の老人に話した。

老人は事態を考慮し、北朝鮮と麻薬の取引をしたり、武器の密輸組織と交流を深めたりと闇業界から情報を仕入れた。

しかし、対応策は見つからず、その後、2010年に起きる死痛苦と、その症状を起こす大規模ガス事件で主人公と出会う事となる。

おおすじ とか 追加設定

<ヤクザと科学者の関係は？>

ヤクザの親友で、「だれかに命を狙われてる」と科学者から相談を受けた。

目的は研究成果で、これがもし、悪い奴らの手に渡った場合、世の中が大変な事になるかもしれない。

直ぐにでも研究成果を破棄しなければならぬが自分の研究成果を無かった事にしたくない。

もしかしたら、いつか人類に何かの形で役に経つかもしらない。だから新型ガス物質の生成研究資料のROMを部屋に隠した告げられる。

けれど、ヤクザさんは科学者さんの死後、部屋を探したが何も見つからなかった。

何者かに研究データを奪われたとすると、世の中に危険が及ぶかもしれない。

その事をヤクザの長の老人に話した。

老人は事態を考慮し、北朝鮮と麻薬の取引をしたり、武器の密輸組織と交流を深めたりと闇業界から情報を仕入れた。

しかし、対応策は見つからず、その後、2010年に起きる死痛苦と、その症状を起こす大規模ガス事件で主人公と出会う事となる。

<死痛苦研究家の目線、ガス大量死事件が起きる前>

彼は死痛苦のオカルト現象を研究する者である。

彼は怪文章に書かれた文字の意味を探求して、日夜没頭し、家族まで失って行った。
何かに取り付かれたかのご如く研究していた彼は、ついに答えに確信しエジプトにたどり着いた。

あらゆる言語で翻訳しエジプトの象形文字を当てはめて判ったのが、エジプトの王家の谷に埋葬された棺の書かれた文字と同じであると気づき、今、テレビに出演し死痛苦の真相を究明した事を熱く語っている。

ホテルの一室にて、そのテレビを真剣に見ていた少女が居る。それはヤクザ一家の娘。

そこへ、ヤクザな護衛がノックする。

小声で

「お嬢様！ お時間でございます。」

少女は、ちえっと舌打ちし、表情を不快にする。もう、乗らなくなった車椅子を無視する様に、護衛と出て行く。

駐車場にて7人の護衛をつけてベンツに乗り込み発進。

向かった先は病院。

瞳孔を調べたり、傷のある腹を触ったり、舌を見たり検査をしている。

護衛が外に居ると、死痛苦で苦しむ患者を発見。

親友の科学者の事を思い出す。その場から立ち去る男を目撃

その場から逃げ去る怪しい男に護衛が追いかける。だが、尾行に気付いた男にまかれて見失ってしまう。

男は電話で話している

電話の相手の声は4、50歳。

「すみません。何者かに尾行されたかもしれません。しばらく身を潜めます」

「そうか、お前が居ないと任務に支障をきたしてしまうが、か」

「申し訳ない」

「相手の顔は見たか？」

「いえ、尾行を巻くのが精一杯で・・・」

「わかった。こればかりは止む終えない。後は我ら同士に神の加護があらんことを祈るだけだ。」

「はい。」

「では切るぞ、」

「はい」

電話を切る。

男はヤクザ達に束縛されて電話を掛けていた。そして逆探知が完了した。

本当はヤクザは追いついていて巻くのに失敗して拷問を受けていた。怪しい銃を奪い取られ、何をしてかそうとしているのか吐かせようとボコボコにした。そして電話を掛けさせて、逆探知させようと

した。

「逆探知成功です。座標・・・」

< 4、50歳の男目線 >

部下との電話を切った後、テロリストのリーダーはマイクを手にして話す。施設に言葉が響き渡る。

「同士が一人、ミスを犯した。恐らくこの場所が突き止められたに違いない。だが、運が良かった。我々の準備は既に整っている。もう、誰にも我々を防ぐ事は不可能だ。では、同士諸君、仕事を始めよう！」

ガス爆弾をトラックに詰め込んでいるのが終わり、トラックは発進される。。

< ヤクザな護衛がホテルにて老人が会話をしている >

老人は異様な形の銃を手に持ってマジマジ見ている。

老人は会話の後、窓から外を眺める。

しばらく眺めた後、銃を金庫にしまう。

一方、主人公私は警察にて、ガステロについて熱弁している。

着きれて貰えずガツカリしていると、津波が来ると狂言して居ると、テロが起きた。

そして、山に駆け出す。

一方老人は、昼間に町に漂う煙に気付いて、走り出す。

ヤクザ、一同追いかけて、気になった孫娘も追いかけて、山の林の中で町を見下ろしていた。

そして、主人公（私）が山を駆け上り老人と出合った。

<私>

私に変ホテルにて宿泊した翌日、政府の公式発表が行われた。

テロリストによる毒ガステロ事件ということで、死者は凡そ10000人を超えている。ガスは空気中に拡散し、すでに軍のバリケードは解放された。

私もそれに合わせて、自宅へと帰る。

その帰り道での事、ホテル出た駐車場の隅に1台の黒いタクシーが止まっているのを見た。

中には誰も乗っていない様子であるのだが・・・
車体が、心なしか動いた気がした。

タイヤとボディの間に隙間が通常の車の規格より、1cm程狭い気がする。

恐らく何か重い物が乗っているのだろうが、外の窓ガラスから覗いても特に気になるものは無い。

あるとすれば、タクシーの二台に何かを積んであることだろうが・・・
まさか人が入っている訳がないよな・・・

<タクシーの中にて>

主人公がタクシーから、離れた後、タクシーあら小さなつめき声がある。

中で縛られている人あり、彼はボコボコにされたあと、そこへ閉じ込められたのだ。

だが、誰も気づいてない。彼からGPSの発信音が聞こえる。二の腕にズームアップし腕の内部にズームアップ、発信装置が埋めこめられていた。これではテロリストに位置がばれてしまう。

その後の世界観

テロが起きて大惨事になるさなか、政府は重要な事実は何も公にはしなかった。

あくまでテロの犯人探しをするだけであり死痛苦との関連付けは一切無い。

症状は死痛苦そのものであるのに、

警察は国内外をマニュアル通りの形で捜査するだけである。

そんな折、中国で死痛苦と同じ症状での死人が出始めた。

中国だけでなく、韓国、アメリカ、ドイツ、世界各地に死痛苦が広まっていった。

当初は死痛苦現象は日本国内のみの発生かと思われていた。

だが、実際はそうでは無かった。

確率的に偶然日本で連続して起きただけなのか。

中国側から始まった筈の死痛苦の死亡記録を見逃したのか。

あるいは自分の国が犯人では無いことをアピールする為に自演的に殺しているのか。

それとも単に苦痛死とは関係なく偶然死が続いているだけなのだろうか。

あるいは誰かに意図的にされてるだけなのか・・・

いずれにせよ

死痛苦の現象は続いた。

ネルネル「いや〜〜下界って面白いな。人類のルールをちよいと弄っただけなのに、こんなに見える光景がちがうんだな・・・エロネスはどう思う?」

エロネス「別に・・・エロい絵じゃないと俺興味ないし・・・

ネルネル「そうだw ボクらが人類の前に光臨してみたら、どうなるかな？ エロネスもやってみたい？

エロネス「イイヨ そうするのは100兆年前にやり飽きたもん。

ネルネル「そうか。判った。僕一人で行って来るね。

――――

――――

――――

――

――

昼間、東京都上空。空が赤く染まり沸騰し始める。時空が擦れ、大きな光とともに異世界の門が開き。そこからネルネル神様登場。

「やあ、やあ、僕が神様ですよ〜」
空気が読めない発言をしました。

だが、超現象に人々は逃げ惑う。

ネルネルの言葉も小さすぎて人に聞こえない。

世界の終わりに恐怖して立ちすくむ者や、楽しむ者もいる中で、ネルネルは微笑む。

でも誰も近寄らない。

近寄ってきたのは、テレビのカメラを持った取材陣。

その時、改めて神様は自己紹介した。

全ての原因は自分にあるのだと説明した途端。
人々の心に殺意が生まれた。

「あのう・・・だったら事件も何も無かった状態にしてくれませんか？ 私ら迷惑してるのですよ」

取材陣の一人が神に向かって言った。

「え？ 迷惑だったの？ 全然判らなかつたよ。」

その時、世界から神に殺意が向けられた。

「じゃあ、私たちを幸せにできますか？」

「え？ 勿論できるけど・・・して欲しいの？」

「はい！」

言ってみるものです。取材陣頑張りました。

「で？ 幸せって何？」

全世界が協力して幸せが何かを議論した。

幸せの定義を定め、そうして人類を完璧に幸せにしました。
めでたしめでたし

だが、ネルネルは幸せではなかつた。

人々にイベントが起こらなくなり神としては退屈になりました。
ので

ネルネルは時間を巻き戻して自分が登場しなかつた設定に変えてみました。

勿論、それだと人類が可愛そうなので、新しく宇宙を一個作って別物として遊ぶ事にした。

時は流れ

ネルネルは世界の過去を振り返っていた。
下界を見ていた。

（聖徳太子時代にて）

聖徳太子は会議している10人の意見を同時に聞いている。

その時、一人が悲鳴をあげて上空を指差した。

上空に巨大な宇宙船が現り、そして去っていく。

もつと過去へ巻き戻し

（ナスカ時代 西暦1000年）

上空1000mから宇宙人の絵、他色々音楽つき

http://www.youtube.com/watch?v=iGVZCIOjb1o&playnext_from

[TL&video=OJ0Ty8JgJuk](http://www.youtube.com/watch?v=TL&video=OJ0Ty8JgJuk)

ここにある様な宇宙人の絵を描いている親子が居た。

「らー」

「ねそーる」

「むすす」

「57んp」

「b - ^」

殴られる子供

「にー」

「もっ」

「にいー」

土下座する子供

ネルネル神「これじゃあ、これ見ている異次元の君たちには判らないね。」

ネルネル翻訳発動~~~~~!!

異次元の人たちは言語がわかる様になった。

「親父！ 今取り組んでるこの絵は何の絵なんだ？」

「・・・俺にも判らん。」

「何だよ！ 親の癖に判らないのかよ！」

「親になんて口の聞き方するんだ。」

「親なら知っててあたり・・・」
殴られる子供

「イキナリなにすすんだよ」

「親に対してその態度はなんだ！ 今晚の飯は抜きだぞ！！」

「ごめんなさいm」
土下座する子供

時は流れ村長邸にて親子居る

「親の知らないことは村長に聞けだ。わかったか？」

「親の知らないことは村長に聞けだな。判ったよ」

「そんな事より、腹減った。オレは先に帰る」

「あ、僕も腹減ったから、帰る。」

二人は村長邸玄関口で帰り、どんぐりを茹で始めた。

時は流れ村長邸にて別の子供が話を聞いている

「あれはのお、16代前の村長が言ってたらしいのだが・・・

その頃の村長はまだ子供でな。神の住む森へ入って行ったそうなの。

「え！ か神の森に入ったの？行っては成らないと言われるあそこ
に？」

「そうじゃ。その森の先でその生き物を見つけたらしい。見たこと
無い生物に驚いて腰を抜かしてたら『やつほー』とか吠えて前足を
上げたそうなの。で、とりあえず身の危険を感じたそうなので走って逃げ
たそうなの」

「そ、その生物ってもしかして神様？」

「かもしれない。何処の森を探してもその生物は見からないし・・・
けれど村長は神の土地に入った事がバレたら罰を受けるから誰にも
言えなかったらしい。

「じゃあ、何で村長は知っているの。」

「ずっと言うのを我慢した村長だけど、年を取って死を悟った時に
『こりゃもう時効だよ』って感じで仲間に行ったのだそうなの。そ
したら、仲間達も神の森に入った事があるらしくて、その神を見た
という話の展開になったらしい。と言うわけで、あの絵は神様の絵
なのらしい。

「なんか、村長は先代の話を信じてないみたいだね。

「そりゃそうじゃ。実際、自分が見たわけでないし、自分の目で見
た物でないと信じないのじゃ。言い伝えにある神仕業そのものにし
ても物理的にありえないし。ここだけの話、ワシも何度か、その神
の土地に足を踏み入れた事があるのだけど、何もなかったし・・・
え？ 村長？ あの森に入ったの？ いけないんだー！」

「そうね。でも、ワシは村長じゃ！ 今、この時点から神の森に入
っても許すというルールにする」

「えー！ー！！！」

もつと過去へ巻き戻し

（紀元前30年、エジプトにて）

ピラミッド内部の最深層で棺に刻まれた文字を見る男。

「さて、仕事も終わったし、帰ろうぜ！ アレン」

ナレーション「アレンと呼ばれた男は年の頃34歳。エジプト時代
の正社員みたいなもので、王族が入る棺に象形文字を書く仕事をし
ていた。」

「しかし、脅迫文章とは怖いね〜！ 『棺を開けたら君死ぬよ！
王の名の下に窒息死の刑だよ』って書かれたら流石に誰も開けな
いよね〜w てか、ミイラが蘇るって本当に信じてるのかね？」
アレンを見ながら仕事仲間のボブは呟いた。

「まあ、いいじゃないか。こんな下らない事するだけでマネーが貰
えるのだから・・・」

アレンは自分に妻子が居るから懸命だ。

「まあね。確かに、こんな下らない事で金が貰えるのだからラッキーだよ。でもさ、ホントのラッキーはエジプトの王族だよな」
ボブは皮肉交じりに呟いた。

アレン

「確かに・・・エジプトの先代は超幸運だよな。砂漠の真ん中で偶然大量のエメラルドを見つけたのだから・・・」

ボブ

「羨ましいよな（*´、´）＝３ハア

アレン

「まあ、そりゃあ、羨ましいけど・・・」

ボブ

「よしっ！決めた！俺、旅に出る！

俺も砂漠の真ん中でエメラルド見つけてくる！」

アレン

「落ち着けボブ！ そうやって何人も不毛な人生を送っているのは、お前が一番良く知っているだろう。お前の親父さんだって・・・」

ボブ

「冗談だよ！ 糞親父の名前は出すな馬鹿！

アレン

「・・・」

ボブ

「とにかく帰ろうぜ！俺、腹へって死にそうだ」

ナレーシヨン「その数カ月後、クレオパトラ7世が気楽に自殺後、後継のツタンカーメンは暗殺された。そして国は一気にローマに攻め込まれた。ローマはエジプト人を奴隷にし財宝を奪い国へと帰りました。それにより、ピラミッド建設事業が放棄され社員約300、非正規労働者約4000人は路頭迷いました。当然、アレンは職を失い。民は、そのまんま餓死しました」

「ちよつと横ヤリ失礼」

作者登場しました。作者語ります。

「早口言葉で誰にも聞き取れない感じで演出しよう編」

「世間が知ってる歴史の記録と違いますけど、実はこれ真実よ。歴史ではローマがエジプトを支援してた事になってるけど、エジプトに支援してピラミッド建設してもローマに何の得もないのね。ローマは一日にして成らずとか言うけど、本当はエジプトの財力使って一日にして成ったのね。ちなみに、エジプトの財源となったものは宝石の鉱物なのね。遙か昔、巨大隕石がエジプトに落下して、その爆発エネルギーによる科学反応でエメラルド宝石の様な鉱物が大量にできたのです。この科学反応は核兵器の爆発実験でも立証されてて、エメラルドに似た石がその跡地から見つかります。それと同じ現象です。」

エジプトの民の大半は、エジプトの下で生まれ、収入を得る仕組みもソレしか知らず、また、ソレが当たり前の日々だと思っていただけに、生きる術がありません。筋肉しか無いのです。農耕しようにも、知識が元々無く、大半の人間が飢えて餓死していきました。歴史を記録に残す技術を知る者は、民では皆無に等しく。民にとってエジプトからマネーが支払われないという現実のみで、なぜ、そう

なるのかという仕組みさえわかりません。勉強した事ないので。だからこそクレオパトラはマネーをくれない鬼という噂が一人歩きして口頭で伝えられ歴史に悪女として残りました。もし、本当にクレオパトラ悪説ならば、歴史の物的証拠が現代に残る筈です。例えば、エジプトに奴隷の光景の絵を示すものがエジプトに書き記されたりして民が後世に残して主張した筈です。エジプトが3000年以上、下らないピラミッド建設が可能だったのは、ローマと関わる以前から生活の余裕があった証であり財源がある証拠なのです。それが3000年継続されただけなのです。一方ローマは人と人との殺し合いをさせて鑑賞して楽しむコロシウムをしました。そんな制度をするくらいは国なのだから、金を奪うし、エジプト民4000人を捨てるのは容易なのです。だからこそ、民全てが餓死し、記録を残せる知力のある少数貴族はローマに根絶やしにされてしまったのです。アレン君とボブは、物語上、字を知っている口ぶりでしたが、本当に何も知らずに言われただけの割り当てられた仕事をこなしていただけなのです。マネー制度は本当は無くして食料の現物支給だったのです。民は実に可愛そうで死してあの世で物事の真実を知って憎悪に苦しむ事になります。この一連の事件を命名して『エジプト侵略作戦』と言い根本はローマのオクタ비아ヌスとアントニウス派に分かれた争いが発端になっている。いわゆる自民と民主の争いみたいなエジプトがアントニウス派に協力して争いに敗れてしまうのだが歴史ではエジプトが負けてエジプト国がローマの配下となつているが本当は違うだよね。あくまで民主、自民の争いだからエジプトそのものはクレオパトラが政権を維持してただけで、そのクレオパトラがその直後に自殺してしまい、直後、後継のツタンカーメン死んでしまったのだ。ツタンカーメンにおいても歴史とは違うけど、ツタンカーメンが生きた紀元前1333年とクレオパトラが生きた紀元前50年代で1000年もの記録が離れているけど、これは年代測定が実は間違つてて、ミイラの横にあった花の年代測定で割り出された結果であり、万が一花が置かれて1000年

後にツタンカーメンの遺体が運び込まれた可能性も0では無い訳で、だからこそ年代測定を疑うのですね。　えと、なぜ、そこまで言

い張っているかという自分の前世は実はクレオパトラでして息子はツタンカーメンだったのです。だから歴史の記録が違うんですよ。

　DNA鑑定でも親は別の人になってますけど、クレオパトラのミイラと比較してください。そうすれば私とツタンカーメンのDNAが親子で近かった事がわかります。　クレオパトラのミイラはピラミッド内部の底の方があから、それを調べて見やがれっただ！考古学者ども！　ってなことは置いて、なぜ、エジプトがローマにのつとられたかという、ツタンカーメンの王妃がローマ人であるその親達が王無き状態からどうしても政治に干渉してきてしまうのですよね。王妃の親達は悪い人では無かったのですが、時代を経るごとにどんどん政権に関わる者が変わりいつのまにか・・・という感じなんですよ。そもそもオクタ비아ヌス派とアントニウス派は同じ国の者同士で殺し合う関係であるからして、危険な因子が後の政権に必ず出てくる訳で、だからこそ、なるべくしてなった訳で・・・私としては、その派閥争いを殺戮無くして収めようと努力したのが逆に墓穴をほる事になったのですが、今振り返って公開したところで遅い訳です。ともあれば責任と言う名目で死んで楽になるうとか安易に考えてたし命を軽んじてたし、後継の息子が後はどうにかしてくれるだろうという、だろう精神で、本当に浅はかでした。　ローマの未来を予測する術も無かったし、いくら語学に優れて堪能でも未来予測能力で正しい決断力が無ければ王は勤まらないのですよね。パパが王だった頃は、酒飲んで女を要人につけて遊びほうけるだけにしか見えなかったけど、ああやって接待的な事も王の務めだとシミジミ今になって思うのよ。ツタンカーメンが死んだのだから多分、私がそういう接待的な事ができなかつたせいだと思うし、女であったが故に勘違いからアントニーが暴挙に乗り出したのだから、だから息子はアントニーに殺されたのだと思う・・・元は辿れば世間知らずで全部自分の責任な訳だけど、でもやっぱり、その

時代、皆がアホだったのも原因の一つだと思うの。とにかくにも先に手をだして殺すという行動に移したアントニーは悪い人で、私の悪い噂を世界に広めた民や兵士、ついでにこれ読んてる貴様も同じ様に悪いわけよ。人を名指しして何か言葉を発するなら、その責任は全て自分たちが取れと言いたい。一人では要因は小さくても1万人が同じ人間の悪口を言ったらそりゃあ、大変な事になるわけよ。これ読んてる人らは良く判るってものでしょう。でもって・これじゃあ、話が終わらないな、いずれにせよ敵を作らない事が父の教えとしたならば、沢山の要人に接待してひいきにする事が重要な訳です」

はい！ 強制終了

宣伝

リビアンガラス隕石衝突でできた宝石 リビアンガラス5・01ct
楽天市場にて、お手軽価格で販売中！！

59

〜最終話（予定）〜

作者は今、マイクを持って記者会見を開いている。

「前回、作り話が真実だとほざいた作者です

その後、歴史を調べて奴隷の壁画がありましたので紹介します」

サンプル

<http://blogs.yahoo.co.jp/saidakyoko/36739637.html>

奴隷・・・ひどいですね。

こんな酷い事をしてるクレオパトラが自ら自殺するとは思えませんね。

この点において歴史の記録がなんだかオカシイデス。クレオパトラは自殺にみせかけて何者かに暗殺されたとか思えない。

そうだ！ きつとそうに違いないよ。うんうん！

でも、そんな事はどうでも良くて、とりあえず民は奴隷から解放されて自由になります。

やったね民よ！

そして、いずれにせよエジプト文明は完全に過去の遺物になります。皆、興味もなくなる。

歴史記録があいまいです。

でも、そのお陰で現代で歴史ミステリーとして楽しめるんですね。

そんな訳で、このミステリーを解く専門家さんを連れてきました。

「どうも！ 麻生太郎です」

「やあやあ、麻生さん。今日は何を語ってくれるんですか？」

「麻生の前世について語ろうと思います。」

「では。どつぞ」

（麻生の前世 麻生さんと作者の語り（麻生さんの目は赤く充血。顔は真っ青で生気が無い。ロボットの様な設定である。というより声はロボットそのもの）編）

麻生の前世を語らせて頂きます。

麻生の前世はクレオパトラ様と政治を動かしてました。

政治を動かす大臣は私以外にも10人程居ました。

会議で議題が上がったのが、

「いざという時はエジプトを助けてくれ！ 頼む！」的な事をローマと契約するか否かについてでした。

いざという時とはエジプトが他国から侵略を受けたり、内乱が起きた場合に、武力行使でローマに支援してもらうというものでした。

それにより、ローマから常駐警備兵を受け入れたり、政治の内政事情やら情報共有等をして、両国が歩調を合わせて発展していったというものでした。

ですが、麻生は、この案には賛同しませんでした。

政治の内情に他国が深く関われば王の暗殺が容易になるといったりスクがあつたからです。

麻生は当然、政治のプロですからこの提案を出した議員の意見に真つ向から反論しました。

けれど、あるうことが、この提案に賛同する者が現れました。

私は信じられなかった。いくら説得しても誰も私の意見を聞き入れてくれないのです。クレオパトラ様に直に意見をしたのですが、どうにも判つてくれません。

そりやそうです。皆、貴族として甘い生活しか知らないのです。

暗殺なんて悪魔的な思想が人間にあるとは信じていないのです。戦争に参加して人を殺す事はありませんが、それでも自らが戦をする訳ではないし痛い思いはした事がないのです。殺されるという意味において貴族たちは無知、そして無頓着でした。

戦争とは王族、貴族にとっては、いわゆる夢事でありゲームであり、仕掛けられたら正々堂々と受けて立つものでしかないのです。

皆は人間の欲や恐怖心に関して知らず危機感が無かった。

歴史の書物にも暗殺事例は無いし麻生の言葉に対して説得力が欠

けました。

「まるで、現代の麻生こき下ろしと同じじゃないですか」

そうです。彼らは金なんてどうでも良いのです。エジプトには死ぬほど財がありましたので金の価値なんて無いのです。必要なのは労働力でした。戦に富んだ警備兵が居れば、とにかく身内の仕事が無くなり楽になる……ただ、それだけの理由でした。

「だからこそ議案は可決された……という事ですか？」

ええ、そうです。そして麻生の嫌な予感は的中しました。

クレオパトラ様は自殺してしまい。後継である息子のリオン様がツタンカーメン王に成られた直後に行方不明となりました。

まさかとは思いましたが、もう手遅れです。

今更下手に詮索すれば麻生も殺されてしまいます。だから、何もせずに傍観を決め込みました。

その後、後継の居なくなったエジプトを引き継いだのがツタンカーメンの王妃であったアンケセナーメン様なのですが、彼女の両親が都合良くローマの人でして、ローマの介入が政治に組み込まれていききました。

いつの間にか王宮内の大臣も兵士もローマの人に代わり、いつの間にか、奴隷制度が導入されました。

エジプトの民たちも奴隷としてローマに連れて行かれ、麻生自身も連れていかれました。当然、公共事業であったピラミッド建設も破棄です。それにより残されたエジプトの民達の殆どは餓死したと思えます。

当時の経済システムは王宮から財をローマに提供し小麦を大量輸

入するという形が取られていました。

民たちは王宮から小麦を支給され、それを対価にピラミッドを建設するというものでした。

多方面から沢山の民族が集まり生活が成り立つ仕組みでしたから・

その仕組みが当たり前の様に定着し数百年は経つてますから、農耕技術もエジプト国内においては衰退してしまいました。

略奪や争いも起きたかも知れません。

危険を考えた周囲の国々は外交そのものをストップしたと思いますから、数千の人が食糧難で大変な思いをしたと思います。

これが麻生の知ってる全てです。

「へー、あっそう！」

” つまらぬギャクにより読者の息の根が今止まった！”

” そのお陰で、この物語の続きを読む事が不可能となった！”

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2245m/>

『約200文字小説から始まるもの』

2011年10月7日09時04分発行